

決定版登場！『ジーニアス総合英語』 —コミュニケーションを支える文法をめざして

西澤正幸



ジーニアスの名を冠して

『ジーニアス総合英語』（以下、『G総合』と略記）は、語法で定評のある『ジーニアス英和辞典 第5版』（以下、G5）との密接な連携のもとに誕生した高校生向け文法学習参考書です。相当数の例文・用例はG5から移植され、文法についての明快な解説と語法についての有用な情報もその多くをG5に依拠しています。辞書を母体にして、その記述を鑑にして編集されているという点で、本書はユニークで画期的な学習参考書です。文法と語法は互いに影響を及ぼしながらことばの使い方を規定します。そう考えると、ことばのしくみの学びは文法と語法の両面から進展していくと推定されます。『G総合』からG5へ、あるいは逆にG5から『G総合』へと相互乗り入れをすることによって学習を掘り下げ広げていくことが期待できます。

万全のサポート

つながりということでは、『G総合』と *Departure English Expression I Revised* との連携も見逃せません。この教科書の指導用資料の Teacher's Manual や Teacher's Book、そして副教材の『グラマーノート』には各文法項目の横に『G総合』の対応箇所が記してあり、この工夫のおかげで授業に関連づけて指導に利用したり、学習を展開していったりすることが可能です。『G総合』はG5と *Departure* との三位一体の学習活動も視野に入れて編まれているのです。

とはいうものの、教師からの指示や部分的に授

業内外の指導があるとしても、『G総合』の実際の使用場面の大半はやはり自学自習になりそうです。その想定のもと、学習をサポートする各種の準拠教材が揃っています。テキストブック形式の『English Grammar』はレッスン数の異なる3種類があり、学習のレベルや進度に合わせて選ぶことができます。また、それぞれに対応した『English Grammar WORKBOOK』も用意されていて、文法知識の確認や定着の助けとなります。モデル文音声ダウンロードすることもできます。さらには、代々木ゼミナールの福崎伍郎先生による講義動画の視聴も可能です。暗唱例文集やフラッシュカードもあります。また、問題作成ソフトも完備されていて、至れり尽くせりです。

本書の内容と構成

『G総合』は序章にあたる WARM UP と正課 24章から成り、高校段階で習得すべき英文法を過不足なくカバーしています。すべての章の冒頭には INTRODUCTION が設けられ、その章で学ぶ文法事項の基本的なイメージがつかめるようになっています。たとえば第4章完了形では、過去形の I lost my door key. と現在完了形の I have lost my door key. を対比させ、前者が「過去のある時点でドアのかぎをなくしたという事実を伝える文」であるのに対して、後者は「過去にドアのかぎをなくし、現在もなくしたままであることを伝える」文である、と書いてあります。ここまでなら他書とあまり違いありません。しかし、続けて「過去形が表すのが点なら、現在完了形が表すの

はいわば線」一言いかえると、「過去が現在とつながりを持つことを現在の視点から見た表現—それが現在完了形であり、過去から現在につながる時間軸が線のようにとらえられている」というようにイメージしやすい説明をつけ加えています。

第1章から第12章までは基本編 BASIC と発展編 ADVANCED に分かれ、BASIC には英語を理解し使うために必須の基本的で重要な知識が収められています。ADVANCED では発展的な内容が扱われます。各項目のはじめには「MODEL」の中で典型的な英文が提示され、それらの例文についての文法解説が続きます。もう一步踏み込んだ情報は「もっとくわしく」から得ることができますし、用法上で気をつけなければいけない事柄には「注意」が目を向けさせます。各節の区切りには「Check」が置かれ、そこで確認問題に取り組みます。英文の情報構造のように複数の文法項目にまたがる事柄は「FOCUS」と題して個別の章から独立したページにまとめてあります。

受信から発信へとつなげる充実のコラム

以上のように、『G 総合』は正確でわかりやすい記述を貫き、オーソドックスな構成をとりながら、随所にツボを押さえた親切な注釈を添えて、文法の理解と定着を図るように設計されていますが、何といっても本書を特徴づけているのは100本にも及ぶコラムの存在です。これらのコラムではコミュニケーションのための文法という観点からさまざまな情報が提供されています。

「Question Box」では、英語を使う時などに誰もが抱きそうな疑問を取り上げています。一例を引いてみましょう。教室の窓を開けようとしたら ALT の先生から I'd rather you didn't open the window. と言われ、それはどういう意味なのかという問いに対して、「窓を開けないで」と言われたのだと回答した上で、この表現は話し手が聞き手の言動をよくは思っていない場合に使われ、目上の人が目下の人に使うのがふつうなので、や

や命令口調になることもあり、それほど丁寧な言い方ではない、と教えています (p.349)。

「比べよう！」では、よく似た形の英文を並べ、意味や使い方の差異について説明しています。たとえば、① I forgot. と ② I have forgotten [forget]. を取り上げて、知っているはずのことや頼まれていたことを忘れた場合は①を使う (“Did you remember that today is our mother's birthday?” “Oh, I forgot.”) のに対して、忘れてしまっと思い出せない場合は②を使う (“What was the title of the movie you saw yesterday?” “I have forgotten [forget].”) というふうに違いを示しています (p.97)。

「英語の発想」では、日本語から考えると間違えやすい英語特有の表現や発想を紹介しています。たとえば please についてのコラムを読むと、「日本語の「～してください」は丁寧な言い方としてさまざまな場面で使えますが、英語の please はどんな命令文にもつけられるわけではありません。基本になるのは、相手がその行動をすることで話し手が利益を受ける場合です。それ以外では、話し手が心を込めて相手に行動を促す時です。そのどちらでもない指示や忠告を表す命令文にはつけられません。(× Please go straight and turn left at that corner.)」とあり、単純に please イコール「丁寧」ではないことがわかります (p.41)。

「～のコツ」のコーナーでは、文法知識を実際の発信の際に活かすためのアドバイスが与えられます。たとえば、「野球の一番の魅力」は「私が野球について一番好きなこと」と読みかえれば、what I like best about baseball と表現できる、と関係代名詞 what の活用を指南しています (p.322)。

* * *

現行の、そして次期高等学校学習指導要領は、文法が「コミュニケーションを支えるものであることを踏まえ」と位置づけています。『G 総合』はまさにこの要請に沿う頼れる学習参考書です。

(にしざわ まさゆき・新潟県立三条高等学校教諭)